

死海文書中の聖書：ユダヤ教と初期キリスト教の多様性

イマニュエル・トーヴ

I. ユダヤ教におけるテキストの多様性

本論文の目的は、宗教的な環境下で用いられる聖書テキストに関して、ユダヤ教とキリスト教の中にある多様性を検証することである。われわれはキリスト教よりもユダヤ教の中の状況により注目することになる。というのも、ユダヤ教に関するテキストの方がより知られているからである。

われわれはとりわけ、数多くのテキストが発見されたユダ砂漠の状況に依拠する。これらのテキストはクムランと、他のユダ砂漠の遺跡群、たとえばマサダ、ワディ・ムラバアト、ワディ・スデイル、ナハル・ヘヴェル、ナハル・アルゴット、ナハル・ツェエリームといった遺跡群におけるさまざまなテキストの現実を反映している。これらの遺跡群〔訳者注：クムラン以外の遺跡群〕は、マソラー本文に先行するグループに属するテキスト、つまり通常プロト・マソラー本文と呼ばれるテキストを蔵している。一方で、クムランについてわれわれは、さまざまな大衆的なテキストを含むテキストの多元性を目の当たりにする。さまざまなテキストのグループ間の違いは、社会宗教的なものとして特徴付けられるのであって、時系列によるものではない。つまり、古代イスラエルにおいては、さまざまなテキストがさまざまなグループによって同時に用いられていたのである。われわれはまずプロト・マソラー本文とマソラー本文を見ていく。

A. (プロト・) マソラー本文

1. プロト・マソラー本文：定義¹

70年前にユダ砂漠の最初の巻物が発見されて以来、マソラー本文の研究は大いに進展してきた。マソラー本文の中世の構成要素である母音記号とアクセント記号は古代の巻物には含まれておらず、それらはより初期のソースに基づく中世のテキストの解説として研究され続けている。しかしながら、子音の枠組み〔訳者注：子音テキスト〕は表向きは古代のものである。というのも、それは、現在ではプロト・マソラーと呼ばれる、ユダ砂漠の巻物のいくつかに見られるテキストと実質的に同一の古代のテキストから始まったものだからである。

新しい用語がこれらのテキストのために発明された。今日の研究者で、70年前には「プロト・マソラー」という用語が存在しなかったなどと実感できる者はほ

とんどいない。あるときから研究者たちは、中世のテキストときわめて密接につながっているユダ砂漠の巻物（前者は後者と直接的に連続していると思なされる）を説明するときに、この用語を用いはじめたのだった²。

2. プロト・マソラー本文：本質

用語から内容に移るにあたり、本当のプロト・マソラー本文を同定したい。しかしながら、古代のソースを中世のテキストと比較するとき（しかもその中世の諸テキストは細かい部分で互いに異なっている）、われわれの枠組みとはどのようなものとなるだろうか。正確なティベリアの諸写本は、セファルディー、アシュケナジー、そしてイタリアの写本としばしば異なっているが、ティベリアのグループ内では、L写本（レニングラード写本）がアレppo写本と異なることはほとんどない。L写本をわれわれの基準点とする場合、中世のテキストが互いに異なっているのと同様に、ユダ砂漠の巻物はその写本と異なっているとはいえない。これらのユダ砂漠の巻物は「確かに」L写本とわずかに異なるが、それは単語のうちたったの2パーセントのことにすぎない。中世のテキストと自然につながっている真のプロト・マソラー巻物の第一の仲間には次のようなものがある。たとえば、MasPs^a（前1世紀終わり）、MasLev^b（前30-後30年）、5/6HevPs（後50-68年）、MurXII（およそ後115年）である。第二の仲間は、まだマソラー系統の内側であるが、単語の10パーセントまで異なっているものである。それはごくわずかなつづりの違いや内容や言語の細部のことである。わたしはこのグループに「マソラー類似本文 (MT-like texts)」という名前を適用している（一方で、Armin Langeはそれらを半マソラー本文 (semi-Masoretic texts) と呼ぶ³）。例としては、4QJer^a（前225-175年）、1QIsa^b（前50-25年）、4QJer^c（前25-1年）がある⁴。

3. プロト・マソラー本文と古代のほかのテキストの対立

ユダ砂漠のテキスト集成に関する驚くべき事実のひとつは、それらが極めてはっきりとした二項対立を示すことである。クムランの集成はテキストの多様性という特徴を持っているのに対し、他の遺跡は単にプロト・マソラー本文のみを反映しているのである。クムランのテキスト上の多様性は、トーラーについて多くのマソラー類似本文を含んでいる。クムランにはその他にも、サマリア五書や七十人訳に近いわずかな数のテキストもあれば、他の「訳者注：トーラー以外の」書物についてはこうした系統に属さない多くのテキストもある。わたしの分析では、プロト・マソラー本文と同定されるほどの長さを持ったクムランのテキストはない⁵。

こうした現状の説明はただひとつである。クムランに住んでいた共同体は、ユ

ダ砂漠の諸共同体とは異なるテキストを好んでいたのである。前 50 年から後 70 年という同時期に、ユダ砂漠の諸遺跡では結局プロト・マソラー本文だけが用いられたのに、そうした巻物がクムランには持ち込まれなかったのは偶然ではない。それどころか、クムランではテキストの多様性の証拠が見出されるのである。この想定はテフィリーン〔訳者注：祈りで着用する箱に入った聖句〕の証拠によって支持され、テキスト上の証拠に社会学的な側面を加えてくれる。

クムランのテフィリーンはユダ砂漠の諸遺跡（ムラバアト、ナハル・ヘヴェル、ナハル・ツェエリームなど）のものとは異なっている。クムランもユダ砂漠にあるが、議論のために、後者のものを「ユダ砂漠のテフィリーン」と呼ぶことにする。

クムラン共同体はテキストに対してオープンな姿勢を取るべきと信じていた。それは大衆的なテキストや、マソラー本文の自由なコピーを反映するテキスト（マソラー類似本文）なども含んでいる。一方で、ユダ砂漠の諸共同体は厳密にマソラー本文を保持した。

ユダ砂漠の諸遺跡で発見された多くのテフィリーンは、クムランで見つかったものといくつかの特徴に関して異なっている⁶。

テフィリーンの 2 つの異なった側面が認められている。というのも、テフィリーンに含み込まれる聖書の一節は、それらのテキスト上の特徴や作成方法与合致するからである。

a. ユダ砂漠のラビ的タイプのテフィリーンは、マソラー本文（プロト・マソラー本文とマソラー類似本文の両方のこと）のつづりや内容と共に、ラビによって要求された一節を含んでいる。それらは修正の方法としての行間の付加を欠き⁷、行末で単語を分割せず、きちんとかたちを整えられた羊皮紙の上に書かれており、羊皮紙の両面への記述や行末での文字の押し込みを許さない。

b. クムランのテフィリーンは、ラビによって要求されている以上の一節を含んでいる。それらは調和的な聖書テキストを用いている。すなわち、イスラエルにおいて大衆的なテキストとして受け入れられている七十人訳やサマリア五書のテキストを反映しているのである。それらは、「クムランの写字法 (Qumran Scribal Practice)」タイプのつづり方や形態論で書かれている⁸。クムランのテフィリーンは、すぐ前の段落で描写されたような詳しい作成方法のすべてにおいて、ラビ的テフィリーンと異なっている⁹。

4. マソラー本文の背景

プロト・マソラー本文の性質に移ろう。これら個々のテキストは（のちのマソラー本文もそうだが）、現在マソラー本文として知られているコレクションの中

に組み込まれる前には、テキストのよせあつめだったと考えるべきである。わずかばかりの統一性の層がそれらに与えられたのは、のちの段階のことであった。第一段階では、それぞれの聖書文書は他の文書から分離した、テキスト上のユニットを形成しており、絶え間ない変化にさらされていた。すべてのプロト・マソラー本文は2つの発展段階を通過した。第一段階では、それぞれの聖書文書は他の聖書文書と比べて、内的にも外的にもすべてのレベルにおいて一貫していなかった。それは特につづりの問題においてそうだったし¹⁰、内容に関しても絶え間なく動いていた。第二段階では、テキストをもはや改変しないことに極度の注意が払われ、それ以降それはきわめて注意深く伝承されたテキストとなった。しかしながら、これらの推測が重要だからといって—そしてそれは推測にすぎないのだが—それらはプロト・マソラー本文の謎めいた背景の解明にわれわれを近づけてはくれない。それゆえにわたしは、内的小および外的なソースからそのテキストの第一段階に関する情報のいくつかの断片を集めようと思う。内的なデータは、テキストの内部に目を向けることで、プロト・マソラー本文の本質に関する何らかの手がかりを与えてくれるかもしれない。外的なデータは、プロト・マソラー本文を受け入れた人々やソースを分析するのに役立つ。プロト・マソラー本文がこれらのソースに影響を与えたのであって、その逆ではない。

a. プロト・マソラー本文をかたちづかった人々に関する証拠はない。特定の神学サークルがプロト・マソラー本文が神聖なものとなる前に、少なくともそのわずかな層の書き直しに関係していたと想定することは魅力的ではあるが、依然として証拠が欠如しているのである。

i. プロト・マソラー本文と他のテキスト証言の比較は、そのテキストの特徴のいくらかを明らかにする。疑いなく、こうした種類の比較は主観的であり、文書ごとに証拠は異なる。トラーについてプロト・マソラー本文は保守的なテキストを提供しており、ほかの証言においてテキストを調和させたり読みを容易にしたりするのは対照的である¹¹。一方で、ヨシュア記 20 章は調和的なテキストを示しており、民数記 35 章 (P) の七十人訳に基づく逃れの町の古い法規を、申命記 19 章の法規に一致させている¹²。わたしはこのように続けることができる。ダビデとゴリアテの物語で、マソラー本文は七十人訳の物語に長い神学的な説明を加えて、神はあまり重要でない者たちを通じてでも自分の民に勝利をもたらすことができることを強調している (サム上 17:12-31)。エレミヤ書では、プロト・マソラー本文の第二層は民族の罪と神の中心性を強調する¹³。しかしながら、マソラー本文上のこうした改訂の層がどれだけ共通点を持っているかはわからない。たとえば、Stipp の結論によれば、エレミヤ書とエゼキエル書のプロト・マソラー本文に加えられた層は共通点を何も持っていないにもかかわらず、両者はともに

七十人訳の背後にある短いテキストを拡張しているという¹⁴。こうした種類の分析はプロト・マソラー本文の背景に関する情報を何も提供してくれない。われわれはプロト・マソラー本文の文書の著者たちについて、あるいはこれらの文書の発展の層について知ることはできるが、必ずしもプロト・マソラー本文そのものについては知ることができないのである。

ii. 同じように、プロト・マソラー本文がプロト・ラビ的サークルの見解に合わせて、内容に何らかの改変を加えたという証拠もない。ガイガー¹⁵やほかの者たちがマソラー本文の中にパリサイ派的かつ反サドカイ派的な改変を見つけようと試みたにもかかわらずである。テキストに見出されるそのような神学的な改変は個々の写字生らによって挿入された¹⁶。プロト・マソラー本文がラビたちに影響を与えたのであって、その逆ではない。というのも、そうしたサークルが活動していたときには、テキストはもはや改変できなかつたからである。

b. われわれは外的な証拠に移りつつ、いったい誰が初期の時代にプロト・マソラー本文を維持していたのかを知りたい。考古学的または文学的なソースを見ると、われわれはプロト・マソラー本文を2つのシナゴグに見出す(下記参照)。またテキストやテフィリオンをマサダの熱心党やユダ砂漠の共同体のバル・コフバ支持者たちの手の中や、さらに後代にはラビ文学の中に見出す。プロト・マソラー本文の使用者の長い列があり、彼らはプロト・ラビ的、パリサイ派的、ラビ的サークルなどを見なすことができるわけだが、一方で、プロト・マソラー本文を使わなかった者たちや共同体を見つけることもできるのである(下記参照)。

c. シナゴグ。マソラー本文がシナゴグに収納されていたという物理的な証拠がごくまれにある。2つのシナゴグで見つかった3つの写本は、そこにプロト・マソラー本文が存在したことを明確に証明している¹⁷。最新の証拠は、エン・ゲディ・シナゴグの「聖櫃(アロン・ハコーデッシュ)」で見つかった、後1世紀から後2世紀(古文書学に基づく)のレビ記写本に関連している¹⁸。このシナゴグは3世紀後半/4世紀前半から後600年頃のものである¹⁹。レビ記1-2章のこの断片的な写本のテキストは、段落分けのような細かいところまでL写本と一致している。これは中世のマソラー本文と完全に一致する最初の古代資料となった。マサダの申命記写本²⁰(申33:17-34:6)は、わずかに67の部分的な単語しか含んでいない²¹。どちらの写本もシナゴグの床下に²²、2つの別々のゲニザの中に置かれていた²³。

前50-1年のマサダ・エゼキエル写本²⁴(35:11-38:14)は、4つの大きな断片的な欄を含んでいるが、わずかな例外のほかには、同様にL写本のテキストを反映している²⁵。

d. ユダ砂漠コレクションの背後の人々。これらの2つの集成の背後にいる者

たち、つまりマサダの熱心党とバル・コフバの支持者に共通しているのは、彼らが自由の闘士であり、かつ政治的な反逆者であることである。同時に、宗教的な事柄について彼らは、エルサレムの（プロト・）ラビ的なセンターの指導に忠実に従った。ある研究者たちは、第二次ユダヤ戦争の指導力には祭司的な影響があったことを強調する²⁶。わたしたちがプロト・マソラー本文のほんのわずかな割合、おそらくは5パーセントにしかアクセスできないというのは正当だろう。しかし、すべての初期テキストは中世のマソラー本文と視覚的には同一なので、他の文書についてもプロト・マソラー本文は中世のテキストと同一だったはずとわたしは考える。

さらには、ラビとプロト・マソラー本文との密接なつながりは、ほとんどのユダ砂漠のテフィリーンの内容に反映されている。それらのテフィリーンはマソラー本文の正字法で書かれており、テフィリーン作成のためのラビの指導を反映している（上述セクション3を参照）²⁷。

後代になると、ラビ文学やピユティーム（典礼詩）中の聖書引用の大多数はプロト・マソラー本文を反映している。この傾向はとても明らかで、それゆえにこれらのソース²⁸におけるマソラー本文からのわずかな逸脱は無視できる。プロト・マソラー本文はさらにタルグミーム、ユダヤ的ギリシア語諸訳、そしてウルガータにも反映している²⁹。

このように、プロト・マソラー本文は後70年より後も前も、パリサイ派に似た必ずしも正体が明らかでないサークルに加えて、パリサイ派の手にも委ねられていた³⁰。しかし、このことはプロト・マソラー本文がパリサイ派の影響の痕跡を示していることを意味しない。

e. プロト・マソラー本文を用いた諸共同体への釣り合いをとるために、わたしはプロト・マソラー本文を用いなかった人々や共同体に向かいたい。まず第一に、これはクムラン共同体である。クムラン共同体ではプロト・マソラー本文はたった一つ、8QPhyl I しか見つかっていない³¹。プロト・マソラー本文と見なされてきた他のクムラン・テキストは小さすぎたり、プロト・マソラー本文であると考えするには特徴が不明瞭だったりする。

第二神殿時代の何らかの文書がマソラー本文に基づいているという証拠は見つかっていない。このことが示すのは、マソラー本文は付加的な文書を書くための基礎としては使われなかったということである。クムラン写本、外典、あるいは偽典のどれも、他のソースを除外して間違いなくマソラー本文に基づいているというはっきりしたしるしはない。もし『神殿の巻物』やペシャリームの特異な読みを除くなら、われわれはマソラー本文を押し付けられることはないだろう。クムランの文書や引用のいくつかはマソラー本文に基づいているようにみえるが、

マソラー本文とこれら他のソースに対立がないときにはこの想定は裏付けられない。ただひとつ、他のテキストを除外してマソラー本文のテキストが引用されているケースもあるが、証拠は限られている。このことは、七十人訳の短いエレミヤ書に比して長いマソラー本文のテキストにも関連している。それは『ベン・シラ』や3つのクムラン文書に関して Armin Lange が示したとおりである。

Lange が示したのは、『ベン・シラ』のヘブライ語テキストがいくつか引用しているエレミヤ書はマソラー本文の長い版に基づいているのであって、短い版の 4QJer^{b,d} や七十人訳にではないということである³²。彼が出す例から、わたしは次のものを引用しておく。エレ 1:10 = シラ 49:7、エレ 18:6 = シラ 36(33):13。同じように、『創世記注解 A (4Q252)』5:2, 3-4 におけるエレ 33:17 および 15 からの引用、『偽預言者のリスト (4Q339)』5-6 におけるエレ 29(36):21 からの引用、『バルキ・ナフシ』3:3 におけるエレ 27:12 からの引用は、七十人訳の短いテキストではなく、マソラー本文の長いテキストに従っている³³。

f. プロト・マソラー本文の最初の証拠（前 50 年のマサダから出たテキスト）は、クムランから出た最初のマソラー類似本文（前 225-175 年に帰される 4QJer^a）よりもずっと後のものである。わたしの見解では、この矛盾は、プロト・マソラー本文がクムランの初期の遺跡に残されていないという事実に起因している。より後代にユダ砂漠にマソラー類似本文を保存した諸共同体は、それらと共により新しい巻物も取り上げたのである。古い時代から、正確な巻物を作り上げる手順というのは、中心地に保存されたマスターコピーとの物理的な比較に基づいていた。こうすることによってのみ、あらゆる巻物の正確なアイデンティティは保たれた。同時に、より不正確な巻物は、ちょっとした改変を自由にこれらの巻物に挿入してしまう写字生によって作られた。

われわれはプロト・マソラー本文を擁した人々や共同体の歴史を辿ることができた。しかしながら、これらの結論には控えめな態度を取らなければならない。なぜなら、それらはプロト・マソラー本文の社会・宗教的環境に関しては有益だが、プロト・マソラー本文そのものに関してはそうではないからである。本文は謎のままである（下記注 46 を参照）。われわれは、プロト・マソラー本文となる前のこのテキストの起源についてあまりよく知らない。もしかするとこの問題は解決することなど決してできないのかもしれないが、少なくともトーラーに関しては、いくらかの手がかりがあるだろう³⁴。

B. パレスチナの大衆的テキスト³⁵

わたしの暫定的な仮定は、トーラーに関してプロト・マソラー本文はパレスチナの知的・宗教的エリートのテキストであり、他の諸テキストは大衆と共に維持

されたというものである。トーラーに関して、プロト・マソラー本文は、マソラー本文の先駆者とでも呼ばれうるグループによって維持された保守的なテキストを反映している。クムラン共同体は、大衆的と見なされたであろう非マソラー本文に固執した。それらのうち、われわれはサマリア五書、七十人訳、そしていくつかの付加的なテキスト（たとえば自由な筆写スタイルで写されたテキスト）を見出す。同様に、エリートでない人々によって保持されていた多くの調和的なトーラーのテキストもある。とりわけサマリア五書と七十人訳は明らかに二次的な特徴を示している。わたしはこれらが大衆的テキスト（popular texts）と呼ぶ。この用語は最初に Paul Kahle によって用いられた（が、これらのテキストのことではなかった）。わたしは、こうした区別が他の〔訳者注：トーラー以外の〕諸文書にも成されたのかどうかをまだ知らない。

わたしのテキスト的見地における想定のひとつは、サマリア五書グループと七十人訳は密接に関連しているというものである。七十人訳とサマリア五書グループが共通の祖先を持っているという想定は、1815年の Wilhelm Gesenius のモノグラフで初めて推測された。彼はサマリア五書と七十人訳の議論を堅実な方向に導いた³⁶。Gesenius の見解では、2つの伝承は、彼が「アレクサンドリア - サマリア版」と呼ぶ共通のソースに由来している³⁷。

1. サマリア五書と七十人訳

わたしの分析の中心は、サマリア五書と七十人訳の間の数多くの一致と、それらの特質の両方である³⁸。これらの2つのソースは、トーラーのすべての文書における二次的な読みに関して頻繁に一致している。たとえば、創世記 49 章におけるヤコブの祝福でのサマリア五書とマソラー本文の相違点のほとんどについて、サマリア五書は七十人訳と一致している³⁹。この近さは、それらに共通した付加や個別の付加において特に見えてくるが、個々の読みにおいてもそうである。トーラーのそれぞれの文書について、七十人訳はサマリア五書よりも多くの調和を含んでいる。五書の文書それぞれの逐語的な分析を試みるまで、二次的な読みにおいて七十人訳とサマリア五書がどれほど一致しているかは分からない（下記を見よ）。こうした一致は、いわゆるサマリア以前のクムラン巻物にも拡張できる。マソラー本文に比して、この2つのソースは創世記 5 章および 11 章の系図リストの改訂についても共通したものを持っており、そこでは改訂的であり、それゆえに二次的な特徴が確認できる。改訂ということはつまり二次的な特徴があるということである⁴⁰。これらの組み合わせられたデータからは、七十人訳とサマリア五書が、実際には一致するのと同程度に一致しないとはいえ、二次的な読みにおいて共通した背景を持っていると指摘することができる⁴¹。トーラーの諸文書は

内容において異なるが、七十人訳とサマリア五書は似たようなテキスト的發展を経験したに違いない。あるいはこの2つのテキストは、のちの段階では別の方向に進んだとはいえ、五書すべてに関して共通のベース・テキストに基づいていた。

2. 七十人訳 - サマリア五書の共通テキスト・ベースに基づく著作

七十人訳とサマリア五書が共通のテキスト・ベースに由来するという考えは、いくつかの再話聖書作品（『神殿の巻物（11QT^a）』、『創世記注解A（4Q252）』、エチオピア語訳の『ヨベル書』、偽フィロン、『創世記アポクリュフォン』、『テストイモニア』）がマソラー本文よりも七十人訳とサマリア五書の共通テキストにより近いという事実から支持される。実際のところ、七十人訳とサマリア五書ではなくマソラー本文にはっきりと基づいた再話聖書作品というのではないのである⁴²。

七十人訳 - サマリア五書に共通のベースに基づいたテキストの付加的なグループとしては、儀礼テキストがある。たとえば、クムランから出たテフィリーンの2つの異なる分岐や⁴³、またテフィリーンと同じ引用句を含む3つの儀礼的なクムラン・テキストである（4QDeut^{j,k1,n}）⁴⁴。

3. トーラーにおける2つのテキスト・ブロックの性質

2つの伝統的なブロックは内容だけでなく性質においても異なっている。ブロックⅡのテキスト（マソラー本文以外のすべてのテキスト）は、共通した二次的な特徴における繋がりによって密接に結び付けられている。これは、ブロックⅠのマソラー本文では主として一次的な特徴によって結び付けられているのとは好対照である。しかしながら、マソラー本文は二次的な特徴もいくらか含んでいることを強調しておきたい。

トーラーのテキスト証言を2つのテキスト・ブロックに細分するという新しいアイデアは、保守と大衆化という2つの異なる筆写アプローチの認識と密接に結び付けられている⁴⁵。

この2つの区分において、テキストの一次的な性質は証明されえない。議論はこのように、調和が中心的な位置を占めている二次的な読みの存在へと移行していく。ブロックⅠのテキストは二次的な特徴がないことによって、そしてブロックⅡのテキストはそれがあることによって特徴付けられる。

ブロックⅡの二次的な特徴を強調するとき、わたしはこれらのテキストの特徴づけを可能にする要素に注目するだけでなく、それらの中心的な特徴を理解しようとする。調和的な付加がトーラーにおいて七十人訳の最も特徴的なテキスト上の特徴を示すということもたまにはある。同様に、Esther Eshel はサマリア五書以前の巻物は「前サマリア五書の」ではなく「調和的」と名づけられる

べきだと主張した。さらに彼女は、4Q158、テフィリーン、メズゾットなどのテキストを含めるために、そのグループを拡張した。わたしはそのグループをさらに拡張する。わたしの取り組んでいる仮説とは、わたしがブロックⅡに割り当てたテキストは二次的なテキスト上の特徴によって示されるが、ブロックⅠに割り当てられたひとつのテキスト、すなわちマソラー本文はそうした特徴をはるかに少なくしか持っていない、というものである。

取り組み中の仮説に入っていないものは、他の文書における状況である。もしわれわれが最も権威あるテキスト形式としてのトーラーのマソラー本文を好むとしても、サムエル記、エレミヤ書、そしておそらく他の諸文書についてはそうではない。このことが意味しているのは、マソラー本文の原型を作った者たちが、トーラーのために彼らが使ったのと同じ種類の写本を、これらの文書については使わなかったということだけである。

4. 五書以降の諸文書における大衆的なテキスト

トーラーについて行ったように、われわれは五書以降の文書についても保守的なテキストや大衆的なテキストを目撃するが、その状況は異なっている。トーラーにおいては多くの場合非マソラー本文が好まれている一方、他の文書ではそうではない。サムエル記については、われわれはどのテキストが保守的／正確なのか、あるいは好まれているのかを、確実に特徴付けることはできない。おそらく七十人訳がそうしたテキストには反映している。エレミヤ書については、2つのテキスト形式の対立はこれらの線のどちらにも即していない。短いテキストも長いテキストも優れたテキストであって、文書の発展において異なった段階に由来しているだけである。同様に、ヨシュア記のクムラン巻物は優れた巻物であるが、マソラー本文から内容的に異なっている。七十人訳のヨシュア記はマソラー本文と等しく古いか、それに先行する写本を反映している。一方で、イザヤ書、十二預言書、コヘレト書、雅歌、哀歌、詩篇については、われわれはいくつかの大衆的な巻物を持っている。それらのうちのいくつかは「クムランの写字法」の学派によって書かれたものである。七十人訳の文書のうちでは、特に列王記上（王国記三）のように、いくつかのものはミドラッシュ的な性質を持っている。それらは非保守的と考えられるべきである。

マソラー本文の性質は謎のままである⁴⁶。マソラー本文のトーラーが保守的なテキストである一方で、サムエル記のマソラー本文と、おそらくはホセア書のマソラー本文はそうではない。いくつかの文書では、マソラー本文は明らかに最古のテキストではない。そしてそれゆえに、マソラー本文中の諸文書を評価するルールは、トーラーと五書以後の文書では異なる。

II. キリスト教におけるテキストの多様性

キリスト教の内部で、テキストの多様性は異なった性質のものである。それは2つの異なったタイプのギリシア語テキストを採用することに触れている。新約聖書の諸文書は、初期キリスト教についてのわれわれの唯一のソースである。それらはギリシア語で書かれているが、新約聖書のヘブライ的な背景についての情報を明らかにしてくれる。つまり、福音書記者やパウロによって用いられていたテキストのことである。他の初期キリスト教作家によって用いられていたテキストもまた関係してくる。

初期のキリスト教徒はヘブライ語聖書のテキストを大いに活用したが、ヘブライ語聖書を直接使ったという証拠は残っていない。残っているのはギリシア語で書かれたキリスト教テキストだけである。このように、われわれは初期キリスト教徒によるヘブライ語ソースの使用について間接的に知ることができる。なぜなら、彼らの聖書解釈システムはクムラン共同体のそれに似ていたからである。クムランのペシャリームという聖書解釈システムは、福音書のそれと多くの共通点を持っている。というのも、両共同体は自分たちの信仰の基礎をヘブライ語聖書に置いているからである。

われわれはここで、聖書のどんなテキスト形式が初期キリスト教徒によって使われていたのか、という問題に移る。上で確認したが、個々のプロト・マソラー本文の文書の背景は異なっているものの、後1世紀になると、プロト・マソラー本文はすでにひとつのテキスト上のユニットとして存在していた。さらに、ヘブライ語聖書というユダヤ教テキストに対する初期キリスト教ソースのアプローチについて、われわれは正当にも問えることも確認した。新約聖書からの引用はいくつかのソースのうちの一つに基づいていたかもしれない。初期キリスト教徒はプロト・マソラー本文、つまりクムラン以外のユダ砂漠の遺跡から見つかったパリサイ派の聖書を使ったのだろうか。答えは、イエスでありノーである。直接的には使っていない。すなわち、ヘブライ語で書かれたユダヤ人のマソラー聖書から引用しているキリスト教ソースをわれわれは持っていないが、新約聖書の福音書やパウロはしばしばギリシア語という仲介者を経由して、そうしたテキストから引用している。というのも、事実上カイゲ・テオドティオンのギリシア語改訂は、パリサイ派やラビのサークルのものと同じ視されるプロト・マソラー本文のテキストを反映しているからである。新約聖書は、七十人訳ではなく、ギリシア語聖書のいわゆるカイゲ・テオドティオンのテキストをしばしば引用する。言い換えると、まさに新約聖書がしばしば批判している者たちのテキストが、新約聖書の中で引用されているのである。しかしながら、私見では、パリサイ派テキストの引用は必ずしもパリサイ派のアイデアを受け入れたことを意味しなかった。

いずれにせよ、引用のほとんどは七十人訳からだが、なぜカイゲ・テオドティオンが引用されたのだろうか。

私見では、初期キリスト教徒のテキスト選択は、いくつかのオプションに絞り込まれる。新約聖書文学がギリシア語であるように、引用もギリシア語だった。それゆえに、ユダヤ的な翻訳である既存のギリシア語訳が引用のベース・テキストとして選ばれたことは自然なことだった。そのときには、ヘブライ語聖書のキリスト教的なギリシア語訳は存在しなかったし、実を言えば、ヘブライ語旧約聖書のキリスト教的なギリシア語版など、いついかなるときも存在しなかったのである。

七十人訳とは異なり、また当該箇所七十人訳よりもマソラー本文に近いような新約聖書の引用を、どういうときにわれわれは認識するのか。ほとんどの引用は七十人訳（古ギリシア語訳）を反映しているので、それらの普通でない引用は特別な状況を反映している。この状況は、その異なったヘブライ語の「原型 (Vorlage)」や自由訳的な特徴によって、とりわけ当該箇所七十人訳がマソラー本文と異なるときに認識される。イザヤ書の七十人訳の自由訳の場合、これらの関係をきわめて容易に認識することができる。そうした場合、新約聖書で引用されている版をしばしば特定することができる。とりわけ、新約聖書の諸文書が書かれるより前である前1世紀のカイゲ・テオドティオン訳は特定が可能である。この版は古ギリシア語訳をヘブライ語テキストの逐語的な表現へと改訂したものである。このヘブライ語テキストは当時のイスラエルで流通していたもので（プロト・マソラー本文）、のちに中世のマソラー本文として続いていったものである。この路線の研究は Barthélemy によって七十人訳研究の領域内で始められたあと⁴⁷、新約聖書研究の領域で Dietrich-Alex Koch、Menken、Wilk らによって継続された⁴⁸。現在明らかになっているところでは、マタイとパウロはカイゲ・テオドティオン訳から引用している⁴⁹。引用とカイゲ・テオドティオン訳のようなよく知られた改訂があまりに明白に一致しているからといって、マタイとパウロがこれらの逐語的な翻訳を作成したと考える理由はない⁵⁰。

こうした引用の有名な例として、I コリ 15:54 でのイザ 25:8 からの引用がある。ここでの引用は七十人訳 (κατέπιεν ὁ θανατός ισχύσας = MT כָּלַע הַמָּוֶת בְּלֶעֱ) ではなく、カイゲ・テオドティオン訳 (κατεπόθη ὁ θανατός εἰς νίκος) である。この引用は、マソラー本文の母音である「לַע (ビラー)」(「彼は呑み込んだ」) を「לַע (ブラー)」(「呑み込まれた」) とする異なった理解を反映している。また「כָּלַע」を「栄光へ」とする異なった語源的理解を反映している。

さまざまな新約聖書文書や古ギリシア語訳、あるいはヘブライ化した改訂のうち、どの写本伝承が優勢であったのか、わたしは統計学的な情報を持っていない。

しかしながら、明らかに、七十人訳（古ギリシア語訳）は新約聖書のほとんどの文書で引用されている⁵¹。そしてマタイやパウロによる初期のギリシア語聖書の改訂の使用は、小数の引用と関わっている。またヨハネ黙示録における七十人訳の使用は独特なものである⁵²。

パウロが七十人訳（古ギリシア語訳）とカイゲ・テオドティオンの改訂を同じ聖書文書について（イザヤ書）、明らかに同じ条件下で、同じ書簡の中で（ロマ書、Iコリ）用いたことは興味深い⁵³。パウロは同様に、列王記上（王国記三）やヨブ記については改訂テキストから引用することもあるが⁵⁴、それらの場合、彼は七十人訳（古ギリシア語訳）からより頻繁に引用している⁵⁵。おそらくパウロは異なった版から同時に引用したか、あるいはひょっとすると異なった七十人訳写本に従って自身の書き物を少し改訂したように思われる⁵⁶。おそらく、パウロによって使われ、しばしば彼のアイデアの発展の中心になったテキストの種類は、彼にとって重要ではなかった。つまり、旅の間、パウロは滞在した共同体でたまたま手に入ったテキストに依拠していた。この状況のため、彼は異なった性質の諸テキストを使うことになった。彼が論争していたパリサイ派サークルに由来するギリシア語テキストにさえ依拠したのである。

マタイが使った聖書の場合も似ているが、同時に異なっている。マタイは、七十人訳（古ギリシア語訳）と初期の改訂の両方を反映しているが、これら2つのソースはおそらくマタイの成立過程の異なった層に由来している。マルコとルカにおける古ギリシア語訳からの引用（たとえば、マタ 3:3 / マコ 1:3 = 七十人訳イザ 40:3）は、マルコ〔自身〕と Q（ルカの場合）に由来しているが、Menken が示したように、マタイはそれらをわずかにしか変えなかった⁵⁷。同時に、マタイにおける 10 の成就した預言は⁵⁸、イザヤ書、エレミヤ書、十二預言書、詩篇においてはカイゲ・テオドティオン訳のような改訂されたギリシア語テキストを反映している。Menken によれば、この改訂版こそ、マタイが後 1 世紀の最後の数十年間に福音書を作成したときに知っていたはずの聖書であるという。一方で、Menken によれば、七十人訳からの引用はマタイのソース〔訳者注：マルコと Q〕を反映しているという。このように、マタイ自身は 2 つの異なった種類のギリシア語聖書を使ったわけではないが、ギリシア語の改訂聖書テキストにこだわった⁵⁹。

個々の著者によって作成された異なったギリシア語の版の使用は、ユダ砂漠からの発見物から知られるように、当時のパレスチナのテキストの状況を反映している。前 1 世紀以降、当時のパレスチナにおけるヘブライ語テキストからの逸脱ゆえに、七十人訳への不満はますます増加していた。そこで七十人訳（古ギリシア語訳）の改訂が現れ始めた。この発展についてのわれわれの主たる情報源が、カイゲ・テオドティオンの改訂を反映する前 1 世紀のナハル・ヘヴェルからの小

預言書写本である。Barthélemy はこの改訂を「アクィラの先行者 (Les devanciers d'Aquila)」であると特徴づけ、「パレスチナのラビたちの影響下で後 1 世紀に達成された聖書のギリシア語訳および改訂についての研究に先行する」ものとして説明している。われわれはクムランやユダ砂漠において、七十人訳を反映する他のギリシア語断片や、おそらくはわれわれの主たる大文字写本のテキストよりも古ギリシア語訳に近くさえあるギリシア語断片を見出した⁶⁰。これらのギリシア語断片のいくつかは、小預言書のナハル・ヘヴェル写本よりも新しい（前 2 世紀の終わりから後 1 世紀のはじまりの間）。ユダ砂漠の異なる地方で見つかったこれらのギリシア語断片は、このように、それらの地方で見つかったヘブライ語テキストと並行するような、異なった社会宗教的な状況を反映している。クムランから出たヘブライ語テキストとギリシア語テキストは共に、共同体がテキストのレベルでは開かれており、マソラー本文に縛られていなかったことを反映している。一方で、ほかのユダ砂漠の遺跡は、ヘブライ語で書かれたプロト・ラビ的（プロト・マソラー）本文と、ヘブライ語テキストを目指した七十人訳のユダヤ的改訂のみに固執した、ユダヤ民族主義的なサークルを代表している⁶¹。

まとめると、初期ユダヤ教とキリスト教におけるテキスト状況は、似たような路線で発展したということができる。ユダヤ教でもキリスト教でも異なったタイプのテキストが知られていた。ユダヤ教では、保守的なテキストと大衆的なテキストに分岐しており、後者のみがヘブライ語聖書に基づく文章の基礎として用いられていた。同様に、ギリシア語を話すユダヤ-キリスト教共同体では、2 つの異なるギリシア語テキストがあった。すなわち、七十人訳（古ギリシア語訳）と、七十人訳（古ギリシア語訳）のパリサイ派的改訂であるカイゲ・テオドティオン訳である。これらは共に、いかなる思想的な意図も反映することなしに、初期キリスト教文書で用いられていた。

訳者：加藤哲平（日本学術振興会特別研究員 PD（京都大学））

注

¹ 本研究の最初部分のより長いバージョンについては、拙論 “The Socio-Religious Setting of the (Proto-) Masoretic Text,” *Textus* 27 (2018): 134–52 を参照。

² もしわたしが間違えていなければ、この用語は最初に William F. Albright によって、彼の「ローカル・テキスト理論」を立ち上げた 1955 年の重要な研究の中で用いられた。この研究の中で彼は、3 つの異なる地域の 3 つのテキスト改訂について書いた。すなわち、バビロニア（プロト・マソラー本文伝承）、エジプト（七十人訳のエジプト改訂）、そしてパレスチナである。William F. Albright, “New Light on Early Recensions of the Hebrew Bible,” *BASOR* 140 (1955): 27–33 の 30 ページを参照。実際、Google Books Ngram

- Viewer プログラムは、この用語が 1955 年より前に英語で書かれた文書には現れないことを示している。
- ³ Armin Lange, *Handbuch der Textfunde vom Toten Meer, I: Die Handschriften biblischer Bücher von Qumran und den anderen Fundorten* (Tübingen: Mohr Siebeck, 2009), 16.
- ⁴ これらのすべてのテキストについてと、この論考で言及されるほかの巻物については、Armin Lange, “2.2. Ancient Hebrew Texts,” in *Textual History of the Bible, The Hebrew Bible, Vol. 1B, Pentateuch, Former and Latter Prophets*, ed. Armin Lange and Emanuel Tov (Leiden: Brill, 2016), 22–59.
- ⁵ 唯一の例外は 8QPhyl I と 4QGen^b (後 50-100 年) である。後者はクムランのテキストに分類されてはいるものの、おそらくは他のユダ沙漠の遺跡に由来するものである。以下を参照。James R. Davila in Eugene Ulrich and Frank Moore Cross, eds., *Qumran Cave 4. VII: Genesis to Numbers*, DJD XII (Oxford: Clarendon, 1994 [repr. 1999]), 31.
- ⁶ データは次のわたしの研究における表や分析の中で提供されている。“The Tefillin from the Judean Desert and the Textual Criticism of the Hebrew Bible,” in *Is There a Text in This Cave? Studies in the Textuality of the Dead Sea Scrolls in Honour of George J. Brooke*, ed. Ariel Feldman, Maria Cioată, and Charlotte Hempel, STDJ 119 (Leiden: Brill, 2017), 277–92.
- ⁷ これらの付加は、エルサレム・タルムード『メギラー』1.71C によれば禁じられている。「巻物において〈行の上に文字をつす〉ことは許されるが、テフィリーンやメズゾットにおいて〈行の上に文字をつす〉ことは許されない」。
- ⁸ 説明については、Emanuel Tov, *Scribal Practices and Approaches Reflected in the Texts Found in the Judean Desert*, STDJ 54 (Leiden: Brill, 2004), 261–73.
- ⁹ 2 つの主要なタイプの区別は完全ではない。というのも、クムランで発見されたテフィリーンのひとつ (8QPhyl I) はラビ的タイプのものである。さらに、クムランで発見されたいくつかのテフィリーンは、要求されていない一節〔訳者注：ラビによる要求以上の一節〕を含んでいないし、クムランの写字法 (QSP) で書かれてもいない (4QPhyl C, D-E-F, R, S, XQPhyl 4)。この事実がおそらく示しているのは、クムランの人々が新しいテフィリーンを作成しただけでなく、外部からテフィリーンを輸入していたということである。クムランのテフィリーンの内容は、おそらく輸入されたテフィリーンを改良したものだった。
- ¹⁰ マソラー本文は一貫しないコレクションである。つまり、文書内および文書間のつづり、意味の区切り、ピスカー・ベエムツァ・パスーク、すなわち特別な点、トラーを他の文書から区別する言語的特徴、そして初期の文書と後期の文書の分け方などにおいて一貫していないのである。
- ¹¹ 以下のわたしの研究を参照せよ。“The Development of the Text of the Torah in Two Major Text Blocks,” *Textus* 26 (2016): 1–27. <http://www.hum.huji.ac.il/units.php?cat=5020andincat=4972>, (2018 年 3 月 29 日アクセス)。
- ¹² Emanuel Tov, *Textual Criticism of the Hebrew Bible*, 3rd ed., rev. and enl. (Minneapolis: Fortress, 2012), 294–97. (以下では *TCHB* と略記する)
- ¹³ *TCHB*, 243.
- ¹⁴ Hermann-Josef Stipp, *Studien zum Jeremiabuch*, FAT 96 (Tübingen: Mohr Siebeck, 2015), 127–40.
- ¹⁵ Abraham Geiger, *Urschrift und Übersetzungen der Bibel in ihrer Abhängigkeit von der innern Entwicklung des Judentums*, 2nd ed. (Frankfurt a. Main: Madda, 1928; Breslau: Heinauer, 1857); Alexander Rofé, “The Onset of Sects in Postexilic Judaism: Neglected Evidence from the Septuagint, Trito-Isaiah, Ben Sira, and Malachi,” in *The Social World of Formative Christianity and Judaism, Essays in Tribute to Howard Clark Kee*, ed. Jacob Neusner et al. (Philadelphia:

- Fortress, 1988), 39–49 (40–41); idem, “Sectarian Corrections by Sadducees and Zealots in the Texts of the Hebrew Bible,” *RivB* 64 (2016): 337–47.
- ¹⁶ たとえば以下を参照。Emanuel Tov, “Theological Tendencies in the Masoretic Text of Samuel,” in *After Qumran: Old and Modern Editions of the Biblical Texts: The Historical Books*, ed. Hans Ausloos et al., BETL 246 (Leuven: Peeters, 2012), 3–20.
- ¹⁷ 写字生の干渉する度合いの低さや上下の欄外の広さから分かるように、2つのマサダ写本は豪華写本である。See Tov, *Scribal Practices*, 125–29. エン・ゲディ写本の上部欄外の大きさは確認できない。なぜなら火事のあとに皮が縮んでしまったからである。
- ¹⁸ Segal, “Leviticus Scroll”を参照。
- ¹⁹ Yoseph Porath et al., *The Synagogue of Roman-Byzantine En-Gedi* (forthcoming). この場合、シナゴグの考古学的証拠は写本そのものの証拠よりもあとになる。このことが示しているのは、写本はかなり長い間使われてきたということである。これはシナゴグという環境では変わったことではない。同時に、Segal et al., “An Early Leviticus Scroll,” 3におけるPorathの主張を参照。
- ²⁰ MasDeut (1043/1–4) [Mas 1c]. 以下を参照。Shemaryahu Talmon, “Hebrew Fragments from Masada,” in *Masada VI, The Yigael Yadin Excavations 1963–1965: Final Reports*, ed. Shemaryahu Talmon and Yigael Yadin (Jerusalem: Israel Exploration Society, 1999), 51–58.
- ²¹ この写本は文書の結部を含んでいる。最後の数葉が過剰な使用により損傷を受けたということはありえないことではない（1QIsa^aの最後の欄の書き直しを参照）。この断片がきわめて限定的な範囲のものでしかないことは承知しているが、通常マソラー本文と関連する贅沢な性質（注16を参照）は考慮に入れるべきである。以下を参照。Tov, *Scribal Practices*, 127. これらすべては、一つの段落分け（33:19/20）を含め、L写本と一致している。例外は1つの細かい字のつづり方である（33:19 MT Codex L ורשפוני; MasDeut ורשפני）。写本は初期ヘロデ時代（前30–前1年）のものとしてされている。以下を参照。Talmon, “Hebrew Fragments,” 53.
- ²² この時代にこの建物がシナゴグとして使われていたかは不明だが、イガエル・ヤディンはそう考えている。Yigael Yadin, *Masada, Herod's Fortress and the Zealots' Last Stand* (Jerusalem/Tel Aviv/Haifa: 1966), 181–92. いずれにせよ、熱心党が来たときに、彼らは確かにこの建物をシナゴグとして使った。以下を参照。Ehud Netzer, *Masada III, The Yigael Yadin Excavations 1963–1965, Final Reports, The Buildings, Stratigraphy and Architecture* (Jerusalem: Israel Exploration Society and the Hebrew University of Jerusalem, 1991), 402–38.
- ²³ Lee I. Levine, *The Ancient Synagogue: The First Thousand Years* (New Haven: Yale University Press, 2000), 35–41
- ²⁴ MasEzek (1043–2220) [Mas 1d]. 以下を参照。Talmon, “Hebrew Fragments,” 59–75.
- ²⁵ つづりについて8つの違い、細かい点について3つの違いがある。段落分けについてMasEzekは、Talmon, “Hebrew Fragments,” 73によって記録されているいくつかの中世のテキストとほぼ同一である。一方で、L写本とMasEzekの共通テキストは、これらの章については、しばしば七十人訳のテキストとは異なっている。
- ²⁶ David M. Goodblatt, “The Title *Nasi* and the Ideological Background of the Second Revolt,” in *The Bar Kokhva Revolt—A New Approach*, ed. Aron Oppenheimer and Uriel Rappaport (Jerusalem: Yad Izhak Ben Zvi, 1984), 113–32. Heb.
- ²⁷ 驚くべきことに、ヘブライ語資料を二種類に分ける区別（クムランにおけるテキスト上の多様性と他の遺跡におけるプロト・マソラー本文のみの使用）と同じ区別がユダ砂漠で見つかった「ギリシア語テキスト」にも見出される。クムランのギリシア語五書テキストは七十人訳の中心的な伝統を反映しており、初期の段階ではときにマソラー本文と異なっている。一方で、ナハル・ヘヴェルの8HevXII grは、古ギリシア語訳の小預言書

をプロト・マソラー本文に合わせて改訂した前1世紀のユダヤ的伝統を体現している。このように、クムランのヘブライ語およびギリシア語テキストは、プロト・マソラー本文に縛られない、聖書テキストに対する開かれたアプローチを示す共同体を反映している。その一方で、ユダ砂漠の他の遺跡は、ヘブライ語でもギリシア語でもプロト・マソラー本文のみにこだわるアプローチを代表している。このように、ナハル・ヘヴェルの巻物から得られる情報は、プロト・マソラー本文の社会状況についてのわれわれの知識を、ヘブライ語テキストの理解のためにかつて用いられたことのないような方法で豊かなものにしてくれる。ナハル・ヘヴェルの同じ遺跡では、民数記、申命記、詩篇のプロト・マソラー本文が見つかったばかりか、Barthélemy が出版前にはそのタイトルをラビ・ユダヤ教とつなげたギリシア語聖書のヴァージョンも見つかった。Barthélemy は個々の翻訳の選択肢とラビ的な聖書解釈のリンクを大げさに作り出してしまっている。

²⁸ Tov, *TCHB*, 33.

²⁹ わたしの研究を参照。“The Aramaic, Syriac, and Latin Translations of Hebrew Scripture vis-à-vis the Masoretic Text,” in Emanuel Tov, *Textual Criticism of the Hebrew Bible, Qumran, Septuagint: Collected Essays, Volume 3*, VTSup 167 (Leiden: Brill, 2015), 82–94.

³⁰ わたしは David Andrew Teeter, *Scribal Laws, Exegetical Variation in the Textual Transmission of Biblical Law in the Late Second Temple Period*, FAT 92 (Tübingen: Mohr Siebeck, 2014), 227–37 によるいくつかの批判に感謝する。

³¹ プロト・マソラー本文である 4QGen^b はクムランのテキストとして分類されているが、おそらくユダ砂漠の諸遺跡の1つに由来しており、クムランのテキスト集成からは分ける必要がある。注5を参照。

³² Armin Lange, “The Book of Jeremiah in the Hebrew and Greek Texts of Ben Sira,” in *Making the Biblical Text: Textual Studies in the Hebrew and the Greek Bible*, ed. Innocent Himbaza, OBO 273 (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2015), 118–61.

³³ Armin Lange, “Texts within Texts: The Text of Jeremiah in the Exegetical Literature from Qumran,” in *Is There a Text in This Cave?*, 187–208; idem, “The Text of the Book of Jeremiah according to Barkhi Nafshi and the Rule of Benedictions,” in *Reading the Bible in Ancient Traditions and Modern Editions: Studies in Memory of Peter W. Flint*, ed. Andrew B. Perrin, Kyung S. Baek, and Daniel K. Falk, EJT 47 (Atlanta: SBL Press, 2017), 289–306.

³⁴ ユダヤ民族の歴史における歴史的な変化が、トーラーにおける2つのテキストのブロック、すなわちマソラー本文と他のすべてのテキストの創造に関して重要な役割を果たしたのではないかとわたしは考えている。そのことについては、わたしの研究“The Development of the Text of the Torah”で論じられている。2つ目のテキストのブロックは、捕囚から帰還したあとにパレスチナで作上げられたものかもしれないが、1つ目の保守的なテキストの方は捕囚民と共にバビロニアから持ち帰られたものかもしれない。このことについてはすでに、Albright, “New Light”と Frank M. Cross, “The Evolution of a Theory of Local Texts,” in *Qumran and the History of the Biblical Text*, ed. Frank M. Cross and Shemaryahu Talmon (Cambridge: Harvard University Press, 1975), 306–20 が論じている。あるいはまた、2つ目のテキストのブロックは、パレスチナにおいて1つ目のブロックとずっと共存していたかもしれない。サマリア五書と、七十人訳およびサマリア五書グループの派生物は、確かにパレスチナ起源であるが、1つ目のテキストのブロックの地理的背景に関するすべての理論は単なる仮説にすぎない。

³⁵ この項については、次のわたしの研究を参照。“From Popular Jewish LXX-SP Texts to Separate Sectarian Texts: Insights from the Dead Sea Scrolls,” *The Samaritan Pentateuch and the Dead Sea Scrolls*, ed. Michael Langlois, CBET 94 (Leuven: Peeters, 2019), 19–40.

³⁶ Wilhelm Gesenius, *De Pentateuchi Samaritani origine indole et auctoritate commentatio*

philologico-critica (Halle: Bibliotheca Rengeriana, 1815).

- ³⁷ *Ibid.*, p. 14. Gesenius はサマリア五書と七十人訳の類似性の背景を説明して、次のように述べている。「アレクサンドリアの翻訳とサマリアのテキストは、互いに似ているユダの写本に由来している」。アレクサンドリアのユダヤ人とパレスチナのサマリア人によって採用されたこのテキストは、オリジナル・テキストから多くの問題点を取り除いた。そしてそれゆえに、二次的なものと特徴付けられるべきである。
- ³⁸ 七十人訳とサマリア五書の密接な関係の詳細な分析としては、次のわたしの研究を参照。“The Shared Tradition of the Septuagint and the Samaritan Pentateuch,” in Emanuel Tov, *Textual Developments, Collected Essays, Volume 4* (2019), 357–72.
- ³⁹ このことは、〔創世記 49 章の〕 3, 5, 6, 7, 8, 10, 11, 12, 13, 14, 22, 23, 26 節におけるマソラー本文とサマリア五書の 20 の不一致のうちの 14 と関係している。
- ⁴⁰ Emanuel Tov, “The Genealogical Lists in Genesis 5 and 11 in Three Different Versions,” in *idem, Textual Criticism ... Collected Essays, Volume 3*, 221–38.
- ⁴¹ 二次的な読みを文献系図を作成する際の導き手となる原理として用いることは、Paul Maas の指示的過誤 (*Leitfehler*, indicative errors) の原理に従っている。Maas, *Textual Criticism*, 42–49; trans. of “Textkritik,” in *Einleitung in die Altertumswissenschaft*, I, VII, ed. A. Gercke and E. Norden. こうした共通の二次的な読みは、数多く生じることでテキスト証言を特徴付けるのに役立つという点で重要である。同じ意味で、サマリア五書や七十人訳に共通した調和が数多く生じることは、これら 2 つのソースがテキスト的に互いに近いものであることを特徴付けるのに役立つ。このことが意識されるとき、サマリア五書の大幅な逸脱は二次的な要素(サマリア五書の後代の内容編集)に帰することができる。とはいえ、そうした編集上の操作は調和そのものよりも桁外れに多いのだが。
- ⁴² 詳しくは、次のわたしの研究を参照。“The Textual Base of the Biblical Quotations in Second Temple Compositions,” in *Hā-’ish Mōshe: Studies in Scriptural Interpretation in the Dead Sea Scrolls and Related Literature in Honor of Moshe J. Bernstein*, ed. Binyamin Y. Goldstein, Michael Segal, and George J. Brooke, STDJ 122 (Leiden: Brill, 2017), 280–302.
- ⁴³ 次のわたしの研究を参照。“The Tefillin from the Judean Desert and the Textual Criticism of the Hebrew Bible” また上の検証も参照 (注 8–10)。
- ⁴⁴ 4QDeut^a は申命記 5, 8, 10, 11, 32 章と出エジプト記 12, 13 章からの部分を含んでいる。4QDeut^b は申命記 5, 11, 32 章からの部分を含んでいる。4QDeut^c は申命記 8 章と 5 章からの部分を含んでいる。このリストでは申命記 8 章からの部分はテフィリーンではカバーされていない。これらのテキストと「クムラン・テフィリーン」との近い繋がりについてや、それらのいくつかはテフィリーンのマスターコピーになっている可能性については、次のわたしの研究を参照。“The Qumran Tefillin and Their Possible Master Copies,” in *On Wings of Prayer: Sources of Jewish Worship, Essays in Honor of Professor Stefan C. Reif on the Occasion of his Seventy-Fifth Birthday*, ed. Nuria Calduch-Benages, Michael W. Duggan, and Dalia Marx, Deuterocanonical and Cognate Literature Studies 44 (Berlin: de Gruyter, 2019), 135–49.
- ⁴⁵ これらの 2 つのアプローチの詳細については、わたしの研究 “The Development of the Text” を参照。
- ⁴⁶ わたしの研究を参照。“The Enigma of the Masoretic Text,” in *Theologie und Textgeschichte, Septuaginta und Masoretischer Text als Äußerungen theologischer Reflexion*, ed. Frank Ueberschaer, Thomas Wagner, and Jonathan Miles Robker, WUNT 407 (Tübingen: Mohr Siebeck, 2018), 45–70.
- ⁴⁷ Dominique Barthélemy, *Les devanciers d’Aquila*, VTSup 10 (Leiden: Brill, 1963).
- ⁴⁸ Dieter-Alex Koch, *Die Schrift als Zeuge des Evangeliums. Untersuchungen zur Verwendung und*

zum Verständnis der Schrift bei Paulus, BHT 69 (Tübingen: Mohr, 1986), 102–98; Maarten J. J. Menken, *Matthew's Bible: The Old Testament Text of the Evangelist*, BETL 173 (Leuven: Leuven University Press/Peeters, 2004); Florian Wilk, “The Letters of Paul as Witnesses to and for the Septuagint Text,” in *Septuagint Research: Issues and Challenges in the Study of Greek Jewish Scriptures*, ed. Wolfgang Kraus and R. Glenn Wooden, SCS 53 (Atlanta: Scholars Press, 2005), 253–71.

- ⁴⁹ たとえば Wilk, “Letters of Paul,” 264 を参照。「21 の引用中 [……] どのときもギリシア語版はヘブライ語テキストと揃えるために改訂されていたように見える。繰り返しになるが、どのときも、この版はアクィラ、シュンマコス、テオドティオンらによってなされた翻訳の 1 つと多かれ少なかれ一致している」。Koch は異なる統計を示している（注 48 を参照）。
- ⁵⁰ この点は Menken, *Matthew's Bible*, 280 et passim で明らかにされている。
- ⁵¹ David S. New, *Old Testament Quotations in the Synoptic Gospels and the Two-Document Hypothesis*, SCS 37 (Atlanta: Scholars Press, 1993), 122–23; Thomas, “Old Testament Citations.”
- ⁵² ヨハネ黙示録はほとんどの引用で七十人訳と近いが、その引用はいくらか特異な七十人訳の表現を含んでいる。以下を参照。Gregory K. Beale, “A Reconsideration of the Text of Daniel in the Apocalypse,” *Bib* 67 (1986): 539–43. また以下を参照。L. Paul Trudinger, “Some Observations Concerning the Text of the Old Testament in the Book of Revelation,” *JTS* 17 (1966): 82–88. Trudinger は、黙示録がしばしばテオドティオン訳ダニエル書を反映していると強調する。さらに、洞察力に溢れる以下の論文を参照。Hermann Lichtenberger, “Das Alte Testament in der Offenbarung des Johannes,” in *Die Septuaginta und das frühe Christentum: The Septuagint and Christian Origins*, ed. Thomas Scott Caulley and Hermann Lichtenberger (Tübingen: Mohr Siebeck, 2011), 382–90.
- ⁵³ ほかの箇所の中では、七十人訳（古ギリシア語訳）が以下に反映している。イザ 10:22（ロマ 9:27）；29:14（I コリ 1:19）；29:16（ロマ 9:20）；40:13（ロマ 11:34）；45:23（ロマ 14:11）；52:5（ロマ 2:24）；59:7（ロマ 3:15）；65:1–2（ロマ 10:20–21）。改訂テキストは以下の節に反映している（徹底した分析としては、Koch, *Die Schrift*, 59–83 参照。彼はここで言及したすべての節をリストにしている）：イザ 8:14（ロマ 9:33）；25:8（I コリ 15:54）；28:11（I コリ 14:21）；52:7（ロマ 10:15）。
- ⁵⁴ 王上 19:10（ロマ 11:3）、19:18（ロマ 11:4）；ヨブ 5:13（I コリ 3:19）、41:3（ロマ 11:35）。
- ⁵⁵ 例としては、以下を参照。Koch, *Die Schrift*, 51–57.
- ⁵⁶ これは Wilk, “Letters,” 267 によって言及されている選択肢の 1 つである。「パウロの引用は少なくとも 3 つの異なった七十人訳の版に由来しているか、ヘブライ語に向けた改訂は一貫して行われなかったかのどちらかである」。
- ⁵⁷ Menken, *Matthew's Bible*.
- ⁵⁸ マタ 1:22–23 = イザ 7:14；2:15 = ホセ 11:1；2:17–18 = エレ 31:15；2:23 = 士 13:5, 7；4:14–16 = イザ 8:23–9:1；8:17 = イザ 53:4；12:17–21 = イザ 42:1–4；13:35 = 詩 78:2；21:4–5 = ゼカ 9:9；27:9–10 = ゼカ 11:13。
- ⁵⁹ Menken, *Matthew's Bible*, passim. 要約については、280–83 頁を参照。
- ⁶⁰ わたしの次の研究を参照。“The Greek Biblical Texts from the Judean Desert,” in *Hebrew Bible, Greek Bible, and Qumran: Collected Essays*, TSAJ 121 (Tübingen: Mohr Siebeck, 2008), 339–64.
- ⁶¹ Ibid.